

# 中国人の姓名—その文化的由来とこめられた意味

董志翹 述/ 下定 雅弘 訳

凡例：

- 1、董氏の注は( )で示す。訳者の注は[ ]で示す。
- 2、長文の董氏の説明は、◆で示す。訳者補記は、※で示す。

人はみな、姓名を持っています。姓名は一人の人間の符号です。これは社会の中で、人を他の人から区別して、他人との交際を便利にする人為的な特徴の一つです。

中国人の姓氏の歴史を遡ると、まことにその淵源の遙けさを改めて実感します。考証によれば、我が国の古代には先ず姓氏があり、後に名字があるようになりました。姓氏は姓と氏とを合わせた呼称です。《通志・士族略序》には、「三代の前、姓氏分かれて二と為り、男子は氏を称し、夫人は姓を称す。氏は貴賤を別つ所以にして、貴き者は氏有り、賤しき者は名有りて氏無し。……姓は婚姻を別つ所以にして、故に同姓・異姓・庶姓の別有り。氏同じくして姓同じからざる者は、婚姻通ず可し。姓同じくして氏同じからざる者は、婚姻通ず可からず。三代の後、姓氏合して一と為るは、皆な婚姻を別ち、而して地望を以て貴賤を明らかにする所以なり」とあります。

ここから、我われは、最初の姓氏の区分は、婚姻を別ち貴賤を明らかにするためのものであったということがわかります。姓は宗族の系統を示す称号であり、故人は早くから、近親結婚は子孫の繁榮には不利であることを知っていて、だから《左伝》にはすでに、「同姓婚を為すは、其の生まるるや蕃しげからず」※といういいかたがあります。

※『春秋左氏伝』僖公二十三年に「男女同姓、其の生まるるや蕃しげからず」とある。

上古の母系社会では、人々はその母だけを知っていて父を知らなかったから、血縁の区別は母系であり、婦人が姓を称したのです。これは、我が国の古代の姓の多くが女の字を偏に持つ、如・姫・姜・嬴・姚等であることから知ることができます。後、父兄社会に入ると、姓氏はしだいに合わさって一つとなりました。上古に

は、ただ貴族だけが姓氏を持っていました、だからその頃の「百姓」というのは、今の意味とは同じではなく、専ら貴族の階層を指していたのです。戦国以後の時代になって、おそらく支配階級の傍系の子孫が民間に入り込んでいって、一般の民衆もしだいに姓氏を有する権利を持つようになり、そこで「百姓」は、広く庶民を指すことになりました。

関連部門の統計によれば、現在、中国の文献に見える姓は全部で5625有ります。そしてそれらの姓の来源は、おおむね以下の幾つかにあてはまります。

(一) 封国・封地・居住地を姓とする：

封国を姓としている者は、例えば蔡・斉・魯・趙等です。封地を姓としているのは、例えば、屈・單・知・卞等です。居地を姓としているのは、例えば、東郭・西門・柳下・南宮等です（これは、日本の渡辺・井上・木下・田中等の姓と似ている）。

(二) 官名・爵号・職業を姓とする：

官名を姓とするのは、例えば司空（技術を掌る官名）・司馬（軍事を掌る官名）・司徒（教化を掌る官名）です。爵号を姓とするのは、王・侯・公等です。職業を姓とするのは、例えば、巫・陶・冶・卜・裘等です。

(三) 祖先の族号・諡号を姓とする：

たとえば堯の族号は唐であり、堯の後裔の中には唐と名乗る者がいます。これと同じなのは、他に虞・殷・夏・周等があります。古代に地位の有る人が死ぬと、その生前の業績に基づいて、評価の異なる諡号(おくりな)を与えました。例えば、周の文王・周の武王がそうであり、彼等の後裔には文・武を姓とするものがいます。同じようなのに、昭・穆・康・莊等があります。

(四) 統治者から賜わった姓：

古代の統治者は、功績のあった臣下に対してはこれを褒める姓を与え、罪を犯した臣下にはこれを貶しめる姓を与えるのを常としました。例えば、私の姓は董ですが、《太平御覽》卷九二九「鱗介部・龍上」に「古は、龍を豢う。故に国に豢龍氏有り、御龍氏有り。昔懿叔安有り、裔子有りて董父と曰う、実に甚だ龍を好む、……乃ち畜龍を擾して以て帝舜に服事す、帝之れに姓を賜いて董氏と曰う」（「董」は管理の意味）とあります。そうすると、私の祖先にも栄ある歴史があったということになります。唐代にはその開国時の功績によって李という姓を賜った功臣が少な

くありません[唐室の姓は李]。またこれとは逆に、隋の煬帝が楊玄感を誅した後、その姓を改めて<sup>きょう</sup>梟としましたが、その意味は梟首（さらしくび）にして民に見せ、永遠の恥辱の証とするということでした。

(五) 自然崇拜により姓を定める：

古人は、自然界および自然物に対して極端な崇拜心を持っていましたから、これを姓とするようになりました。例えば、牛・馬・羊・熊（動物）、金・鉄・石・玉（鉱物）、楊・柳・柏・花（植物）、米・麦・苗・麻（農作物）、黄・白・藍（色）が、そうです。

このほか、中国は多民族国家ですから、長い歴史の進行過程で、少数民族の姓氏の音もまたしだいに入りこんできました。例えば、呼延・宇文等がそうです。また兄弟民族の姓氏も漢字を用いて書き改めるということが出てきました。例えば、唐代、突厥人は原姓「阿史那」を「史」と改めています。近代では、満族の人が原姓「愛新覺羅」を「羅」と改めています。

以上、簡単に中国の姓氏の来源とその発展状況をふりかえってみましたが、ここには中華民族の文化の発展が姓氏に与えた影響を見てとることができます。

## 中国人の名字の文化的由来

### 一、中国人の名と字

現代人がいう「名」は、実際には古代の「名」に相当します。古代の人は生まれると名をもらいましたが、それ以外に成人すると、また<sup>あざな</sup>字をもらいました。『礼記』曲礼上には、「男子は二十になると、冠をつけて字をもらい、…女子は婚約すると、<sup>かんざし</sup>笄を刺し字をもらった」とあります。男子は成年になる前は、ただ髪を束ねているだけで、それで「束髪の子供」と呼ばれます。二十になると、冠礼を行わねばならず、その時に字をもらわねばならないのです。というのは、古代の人がつきあう際には、人を呼ぶ場合、字で尊敬の念を表したので、字をもらうのは社会に仲間入りすることを意味していました。名は生まれたらすぐにつけてもらうもので、字は成年になってから持つものです。名と字とは決して相互に関係がないものではなく、たがいに作用しあい、補いあう一つのまとまったものです。『顔氏家訓』風操篇に、「古、名は以て体を表し、字は以て徳を表す」というのは、まさにこのことをいっ

ています。大きく見ると、名と字との関係には以下の幾つかのものがああります。

(一) 名と字とが、ある一つの典故から引かれている：

たとえば、春秋時代の、陳の公子佗の字は五父<sup>ごふ</sup>ですが、それは『詩経』召南「羔羊<sup>こうよう</sup>」の「素絲は五紵」(白い絹糸の五つの縫目に飾りがついている) から来ています。宋代の王安石の字は介甫ですが、これは『易・予卦』に「介于石」(どっしりと石のように動かない) とあるのから来ています。三国時代の趙雲の字は子龍ですが、それは「龍は雲に従い、虎は風に従う」(『易・乾』) という典故から出ています。晋の劉頌は字は子雅ですが、それは『詩経』に風・雅・頌があるところから来ています。唐代の王維の字は摩詰ですが、それは彼が仏教を尊崇していたからです(維摩詰<sup>ゆいまきつ</sup>は、仏典に登場する人名。『維摩詰経』によれば、彼は釈迦牟尼と同時代の大乘の居士[在家で悟りを得た人]で、後には大乘仏教の居士一般を指すようになる)。古代の読書人は、経典を引用することを好みました。だから、名と字を考えるときにはいつもこういう方法を用いたのです。

(二) 名と字とが、意味が関連しあっている：

この類の名と字とが、大多数を占めています。たとえば、孔子の弟子の仲由は、字が子路であり(必ず由る道)、宰予の字は子我であり(予は我の意)、唐代の李賀は字は長吉(長寿を祝賀)で、孟郊は字は東野(東の郊外)、というのは、みなこの類です。  
※訳者補記：白居易の字が「楽天」であるのもこれに類する。名の「居易」は、『礼記』中庸に「君子は易に居りて以て命を俟ち、小人は険を行いて以て幸を徼む(君子は安全な所において良い運がめぐってくるのを待ち、小人は危険を冒して幸いを求める)」とあるのに拠り、「楽天」は、『易』繫辞伝上に「天を楽しみて命を知る、故に憂えず(天の理法を楽しみ、自分の運命をわきまえる、だから憂えることがない)」とあるのに拠っている。柳宗元も、「宗元」は、一族の大元の意。その字は「子厚」で、これは子孫の繁栄を願ったものだろう。合わせて柳一族が、宗元によって子々孫々隆盛することへの願いが託されているものと思う。

(三) 名と字の意味が反対である：

中国の古代では、儒家の思想の影響が一番大きく、何でも中庸を貴んで、ゆき過ぎることを嫌って、儒家は「過ぎたるは猶お及ばざるがごとし」と考えました。

名と字とが反対の意味になるのは、これによります。例えば、孔子の学生の曾点は字が子晰であり（「点」の本来の意味は小さな黒いあざ、「晰」は白）、端木賜は字が子貢です（上が物を下に与えるのが「賜」であり、下から物を上にさしあげるのが「貢」）。また、唐代の韓愈は字は退之であり〔「愈」はいよいよの意で、ものごとが進む意。「退」はこの反対で、ものごとが後退すること〕、王績の字は無功です〔成「績」がいいことに対して、功が無い〕。劉宋〔六朝時代の宋〕の時の、謝晦の字は宣明で〔晦は「暗い」、年の終わり、これに対して「明」を宣言する、年が明けたことをはっきりいう、という関係〕、宋代の朱熹の字は元晦であり（「熹」は光明をいい、「晦」は暗黒を意味する）、清の徐退は字を進之といいます。これらは、皆な同類の<sup>あざな</sup>字のつけかたです。

## 二、中国人の名付け方の習慣

昔の人は、名のつけかたを非常に重視しました。彼等は、「子に千金を与えるよりも、子に一芸を教えるほうがいい。子に一芸を教えるよりも、子にいい名前をつけるのがいい」とさえ考えました。

一人の人間の姓名では、姓はかつてに変わることができませんが、名は考えて選ぶことができます。もし名づけかたがよければ、当人が異彩を放つだけでなく、姓もまた一緒になって輝きを増します。以下、中国人の名づけかたの方法や習慣について話しましょう。基本的には、意味・音・形の三つの側面に分かれます。

まず意味のことから話しましょう。

名前の意味と寓意（これにこめる意味）にこるのは、中国人の伝統的な習慣であり、またよい名前であるための最低の条件です。中国人は名をつけるのに、めでたい語を好みます。そして昔の人が真剣に求めたのは、「福・禄・寿」の三つのどれかでした。福が「東海」のようであり、寿が「南山」のようであり、官運〔出世運〕が「亨通」〔調子がいい〕であり、財産が「茂盛」であることを望んだのです。だから、昔から無数の、「福生」「福元」「延年」「長寿」という名前があり、また無数の「得官」「世禄」「有財」といった名前があるのです。また名前の中に、喜・慶・順・昌・吉・祥・康・健等の文字が入っているのです。そしてまた、男の子に名前をつけるときは勇ましい強そうな字を使うのが好きで、女の子の名前をつけるときには柔らかいしつとりと美しい字を使うのが好きです。このほか、つぎのような習慣があり

ます。

(一) むかしの聖賢を仰ぎ慕い、有名人を崇ぶ心理：

賢者や有名人は、しばしば尊敬の対象となり、学習の手本となります。この心理は名前をつけるときに強く現れます。むかしから今にいたるまで、その例は枚挙にいとまがありません。漢代の司馬相如(前漢、成都の人、字は長卿。著名な賦の作者)は、戦国時代の藺相如(戦国時代、趙の人、「完璧」の語の出处となった人)を尊敬してこの名をつけました。梁朝の顧野王(初め梁に仕え、梁滅亡後は陳に仕え、黄門侍郎・光禄卿に至った)は、馮野王(前漢、上党の人、字は君卿。元帝の時隴西太守、治績を評価されて中央の左馮翊となり大鴻臚に遷った)を仰ぎ慕って、この名をつけました(字は希馮=馮を希む)。漢代に張良(前漢、韓の人、字は子房。漢を佐けて秦を滅ぼし、留侯に封ぜられた)がいましたが、後世には張学良[1901~2001、張作霖の息子、西安事変を起こした]がいます。唐代に大詩人李白がおり、後世には李希白[宋の道士にこの名有り]がいます。中国の老革命家の鄧小平[1907~1997、中国の最高指導者であり、現代化の基礎を築いた]は、もとの名は鄧希賢(賢くなりた、立派になりたい)です。中国のすでに亡くなった人口学の学者馬寅初[1882~1982、北京大学学長を務めた]は、彼の長女に名をつけるのに馬仰班としましたが、それは彼の娘が我が国の女性の歴史学者班超(字は恵班、一名姫。史学家班彪の娘で、班固・班超の妹。『漢書』の「八表」「天文志」を完成させた)を仰ぎ慕ってそのように立派な学者になるようにとの思いをこめたものです。こういった習慣は、文化大革命の時に頂点に達しました。毛沢東を崇拜するために、どれほどたくさんの人が、「向東」「継東」「衛東」…といった名になったことでしょう！

七八十年代になって、中国では盛んに一字名がはやりましたが、これは実のところ、有名人をうらやましく思う心理の現れです。というのは、ほとんどの名俳優・有名作家の芸名やペンネームが、一字名だからです。たとえば、趙丹[男優、1915-1980、「十字街頭」「馬路天子」等に出演]・姜文[男優、1963~、「芙蓉鎮」「紅高粱」等に出演]・秦怡[女優、1922~、「鉄道遊撃隊」「林則徐」等に出演]・薔利[女優、1965~、「紅高粱」「霸王別姫」等に出演]・方舒[女優、1957~、「烈火中永生」「日出」等に出演]・潘虹[女優、1954~、「最後の貴族」「独身女人」等に出演]・白樺[劇作家・詩人、1930?~、小説「媽媽呀、媽媽!」「愛、凝固在心里」、詩集「金沙江的懷念」他作品多数]・葉楠[作家、1930~2003、白樺は双子の弟、小説「花之殤」、テレビドラマ脚本「唐明皇」等、作品多数]等。そこで無数の袁丹・李文・張怡・

陳利・梁舒・朱虹・王樺・許楠……といった名前が現れ、この傾向は今も続いています。これを現代人の意識と文化の一つの特徴だとさえいう人がいます。

賢者や有名人を尊ぶと同時に、歴史上の悪名高い人物の名前は、名をつける時に当然避けなければなりません。宋代に民族英雄岳飛を陥れたあの秦檜しんがい◆がいますが、後にある書生が、岳飛の墓に書きつけました。「人は宋から後に檜と名のる者は少ない、私は墓の前で自分の姓が秦であるのが恥ずかしくてならない」と。これは姓が秦であることを拒んでいるのですが、自分では選びようのないものです。しかし宋代以後、たしかに檜という名の人はいなくなりました。

◆秦檜は、宋、江寧の人、字は会之。紹興年間に、金が侵略してくると、秦檜は和議を主張し、金と戦うことに反対して、高宗の寵愛を得た。金の侵略と戦った名将岳飛を謀殺している。

## (二) 記念すべき事件・土地・時等に因んで命名する：

人が生まれたとき、何か記念すべき大きなでき事があると、これに基づいて名をつけるのは、なかなかいいものです。有名な映画俳優の陳強[男優、1918～2012、「白毛女」「紅色娘子軍」等に出演、悪徳地主沢で有名]は、長男が生まれた時に、ちょうど、ハンガリーの首都ブダペストを訪問していました。これを記念するために、その子には「陳布達 buda」と名づけ、それからまた次男が生まれたときには「陳佩斯 peisi」と名づけました。私のある恩師は、民国の初めに生まれたのですが、そこで名を徐復とし、字を漢生としました。その意味は満清[満州族の建てた清朝をひっくりかえし、漢室[漢民族の王朝]の栄光を復活しようというものです。こういう名前は、簡単に字づらから年齢を推定することができます。新中国が成立した初めかあるいは50年代に生まれた人の場合、建国・国慶・建設・中華・援朝・保国・衛華◆・躍進等の名の人がたくさんいます。

◆1950年、アメリカ帝国主義が朝鮮を侵略、戦火は中国朝鮮の国境の鴨緑江付近に及んだ。中国は人民の志願軍を組織して「抗美援朝、保家衛国[美に抗し朝を援け、家を保ち国を衛る]ために戦った。これを記念して、当時、子供に「援朝」「保国」「衛華」等の名前をつける人がいた。

60年代の初期に生まれた人は、学鋒・継鋒という人が少なくありません(60年代の初めには、中国では雷鋒◆を学ぶ運動を展開していた)。中国の有名な卓球選手の馬文革

[1968～。1989年～1993年、中国の卓球主力選手として活躍]は、聞いた瞬間に文化大革命の時に生まれたのだということがわかります。

◆雷鋒—1940～1962。もと中国人民解放軍瀋陽区某部班長、1962年、公職に殉じた。彼の一生は「毫も己に利さず、専門に人に利す」であったので、毛沢東主席は全国人民に「雷鋒同志に学ぼう」の呼びかけを行った。

間接的なのは、たとえば、永紅・永忠・紅衛・四新◆等で、やはりはっきりとその時代の烙印を示しています。けれども、こういう名前は余りに政治的色彩が強いので、たやすく付和雷同することになり、だから段々とかような名付けかたはされなくなりました。

◆文化大革命の時、永遠に共産主義事業の後継者となり、永遠に毛主席の革命路線に忠誠を尽くし、毛主席の紅い警護兵となることが提唱された。だから、「永紅」「永忠」「紅衛」等の名がつけられた。「四新」は、文化大革命の時期、「四旧を破り、四新を立てる」ことが提唱されたのでこういふ。「四旧」とは、旧思想・旧文化・旧風俗・旧習慣を指す。「四新」とは、新思想・新文化・新風俗・新習慣を指す。だから、「四新」「立新」を名とする人がいる。

それから、子供の生まれた所や父母の本籍地を名に入れて、そのルーツを忘れないようにするというのがあります。たとえば、北京で生まれると「京生」[京は首都]といい、重慶で生まれると「渝生」[渝は重慶の別称]という類です。魯迅先生の息子は「周海嬰」といいますがこれは上海で生まれたことにちなんでつけたのです。女子バレーの選手の張蓉芳は、成都に生まれました（成都を蓉城と呼ぶ）。本籍が山東に在る人は魯といい、本籍が湖南に在る人は懷湘というというようなものです。父母の本籍地を名前にする事さえあります。たとえば、王滬寧（上海と南京）・周蜀秦（四川と陝西）というように。それで、2年ほど前に、北京で作ったテレビドラマ『渴望』で、劇中に批判される人物で「王滬生」※というのがいて、上海の人たちは大いに不満を持ったものです、上海人をあてこするいやなところがあったからでしょう。また郭沫若[1892～1978、政治家・文学者、日本に留学した。解放後は、科学院院長を務める。業績は極めて多岐に渉る]先生の原名は郭開貞ですが、それは1919年に日本に留学した時、自分で名を沫若と改めたのです。沫水・若水は郭老の四川の故郷に流れている二つの河の名で、彼はこれを名として、故郷への思いを表わしたのです。

※「渴望」は、1990年に放送されたテレビドラマ。監督、魯曉威、シナリオ、李曉明。以下は、中国の wikipedia 百度百科からの引用です。ドラマの中の王滬生が冷酷非情・優柔不断で、心が狭く利己主義のかたまりだった、しかしこれを演じた孫松は実際には、情感豊かな熱血青年で、役柄とは大いにちがうのだが、それが役作りの障碍にはならず、見事に憎むべき王滬生をテレビ画面に登場させ、第九回大衆テレビゴールデン・ホークス賞の最優秀男優賞を獲得した。前世紀の視聴者は、まだ未熟で、事実と虚構のちがいが分からず、孫松はこのため計り知れない代価を支払った……というようなことが書いてあります。“关于《渴望》一部《渴望》使剧中人物王沪生成为众矢之的，同时也使王沪生的扮演者孙松家喻户晓，《渴望》中的王沪生冷漠无情，优柔寡断，且心胸狭隘，是个利己主义思想很浓的人。而生活中的孙松虽非高大全式的英雄，却也是个情感丰富的热血青年，性格与角色之间的差异，并没有成为他塑造人物的障碍，于是一个可憎可恨的王沪生出现在电视屏幕上，并获得了第九届大众电视金鹰奖最佳男配角奖。无奈上世纪八十年代的中国观众大多还很很不成熟，甚至分不清戏里戏外，为了这个形象，孙松可说是付出了很多很多。《渴望》已成过去，孙松正值大好年华，在艺术的旅途上有坦途，也会有坎坷，象过去一样，孙松仍在努力往前走。”

また、子供が生まれた時（干支・季節・時刻）にちなんで名をつけることがあります。たとえば、私が中学の時代の同級生に曹寅甫という人がいまして、私と同じ年ですが、1950年生まれで虎年です。また、春に生まれると慶春といい、秋に生まれると景秋といい、明け方に生まれると旭初(朝日が初めて升るの意)といい、という調子です。

(三) 字の意味により姓から名が生まれる習慣：

漢字の表意文字であるという特徴によって、姓は家族の血縁関係を表わすほかに、文字それ自体の意味をも持っていることになります。もしうまくこれを応用して、姓と名とが調子よくつながると、生き生きとした趣きが出て、味わい深いものです。たとえば、政治家の白如冰[潔く白きこと氷の如し。1912～1994、山東省第一書記を務めた]・学者の馬識途[「老馬は道を知っている」という成語から取っている。1915～。中華詩詞副会長・中国郭沫若研究会副会長]・作家の周而復[「一巡してまた始まる」という成語から取っている、1914～2004。小説「上海的早晨」「長城万里図」等、多数の作品がある]・歌手の成方円◆[コンパスと定規が無ければ四角も円も書けない・テレビタレントの舒適[気持ちがよく快適。1916～]・陳述[事情

を述べる。1920～2006]等等、です。私のともだちに、万という姓の人がいますが、その父は万里程（大鵬は万里を飛ぶ）といい、彼の名は万象新（すべてのものがいつまでも生き生きしている）とといいます。これらはみな、名の付け方の模範的な例です。

◆中国東方歌舞団のソロ女性歌手。[1960～。「游子吟」「童年」等の歌は一世を風靡。1993年全国「最受歡迎的歌手(最優秀人気歌手)」獎を獲得。。

#### (四) 女が男の名をつける習慣：

中国の民間では、男を重んじ女を軽んずる思想が根深くあります。早く『詩経』の中で、「乃ち男子を生む、……載ち之れに璋を弄せしむ」といい、「乃ち女子を生む、……載ち之れに瓦を弄せしむ」◆とっています。

◆『詩経』小雅「鴻雁之什・斯干」に見える。

孔子先生も言っています。\*「不孝に三有り、後無きを大と為す」、この「後」は勿論、家業を継承し、家系を絶やさない男子を指しています。

\*実際には『孟子』離婁上の語。

ですから、男の子がまだ生まれず、女の子だけの家では、常に男の子の名をつけて息子が生まれてきますようにという願いを託すのです。たとえば、招弟・引弟・代弟・宜弟・金弟・銀弟等です（時には意味を婉曲にするために、女の偏を加えて成娣としたりします）。中国の60年代の小説に『三家巷』\*というのがありますが、三家の一つの陳家では、初め女の子が生まれて、名を陳文英としました。次女が生まれると陳文娣とし（次の子はきっと弟という意味）、三女が生まれると陳文婷とし（女が生まれるのはこれで終わりの意）、四女が生まれると、陳文婕<sup>しゅう</sup>と名付けました（<sup>しゅう</sup>は南方では「絶」と音が似ていて、女を生むのはこれで断ち切るという意）。これは、男を重んじ女を軽んずる思想の典型的な例です。

\*歐陽山(1908～2000)の作。20世紀20年代初めの広州の、階級の異なる三つの家庭をめぐると話。

また、女子に名をつけるのに、勝男・亦男・猶男・亜男（男に匹敵する）等とつけることもあります。これらは男の子を期待する気持ちのほか、慰めにより精神的な安定を得ようとする心理の現れでもあります。新中国成立後、男女平等が唱えられて、それでこういう名前は日毎に減りました。しかし、文化大革命の時に、毛主席が「きれいな服装なんかつまらない、戦う姿が大好きだ」◆「武を重んじるよ

うに」◆◆と激励したために、再び女の子が男の名をつけるのがこの当時のはやりとなりました。たとえば女の子の名に、要武・愛武・学軍・紅兵・立新等の名が少なくないということです。それで名前からは、まるで男女の区別がつかないということになり、大変な不便をもたらしました（日本の女の子の名前が大抵「子」がついていて区別しやすいのとは大きなちがいです※）。

◆毛沢東「為女民兵題照」詩に「颯爽たる英姿五尺の槍、曙光初めて照らす演兵場。中華の児女は奇志多し、紅粧を愛さず武装を愛す」とある。

◆◆1966年8月18日(当時は文化大革命の初期)、毛沢東主席は天安門の城楼で革命群衆に接見した。北京の紅衛兵の代表宋彬彬(女)は、毛主席に「紅衛兵」の腕章を献上した。毛主席は彼女に名前を尋ねた。宋が答えると、毛主席は言われた、「武を重んじるように」(「彬彬」の名は「文質彬彬」[『論語』雍也]に由来するので)。

※女子の名前の一位をネットで検索してみると、1964年が由美子、1965年が明美で、この年、現代で初めて、「子」がつかない名が登場、66・67年が、また由美子で、68年～70年は直美、71年～74年は、陽子。以後、久美子・智子・陽子が入れ替わり、1980年、絵美、81年、恵、82年、久しぶりに「子」のつく裕子、83年～90年、愛。91年～96年、美咲。以後、明日香・萌・未来・優花、そして、2000年、ひらかなの「さくら」の登場となっている。日本の女の子の名に「子」がつくのが普通なのは、1982年までということのようだ。

意味に着目して名をつけるやりかたは、ほかにも色々あります。たとえば、夢で見たことに基づいて名をつけたり、偶然のできごとをそのまま名にしたりとか。しかし、これ以上は申しません。

次には、音との関係です。

姓名は、呼称であるからには、声を出したときに、はっきりと聞き取れ、発音しやすい音でないといけません。漢字は単音節の文字ですから、どの漢字もみな声・韻・調を備えています。ですから、昔から、名をつけるときには、声・韻・調のバランスに対しても非常な注意をはらってきたのです。おおまかにいって、以下のようなことがあります。

(一) 名前の末に陽声の韻尾を多用する：

漢語の韻母は、韻尾が異なるのに基づいて三種類に分かれます。それは、陽声の韻（鼻音の-m,-n,-ng で終わるもの）・陰声の韻（母音で終わるもの）・入声の韻（つまる音の-p,-t,-k で終わるもの）です。陽声は、鼻音の子音で終わるので、発音するとき鼻腔で共鳴して、音がよく響きます。しかし、入声はつまる音で終わりますから、その音はパタンと止まってしまいます。それで名をつける時には、たいてい陽声の韻の字を末に使います。（少なくとも陰声の韻の字を使い）、一般に入声の韻の字は使いません。私がかつて蘇州大学の中文系の学生を対象にして姓名を調査した所、名の終わりに陽声の韻の字を使う例が、70%を占めていました。ですから中国の男子の名の終わりには、剛[gang1。以下、アルファベットにつけた数字は声調を示す。1は高く平らな音、2はキュッと上がる音、3は低い音、4はストンと落ちる音]・強[qiang2]・雄[xiong2]・康[kang1]・生[sheng1]・亮[liang4]・堅[jian1]・明[ming2]・山[shan1]・峰[feng1]・中[zhong1]・軍[jun1]等の字が非常に多いのです。女子の場合は、名の終わりに、珍[zhen1]・玲[ling2]・瓊[qiong2]・芬[fen1]・芳[fang1]・蘭[lan2]・英[ying1]・鳳[feng4]・燕[yan4]・香[xiang1]・雲[yun2]・娟[juan1]等の字が実に多いのです。これは、文字の意味の他に、これらの文字がみな陽声であるという事が、大きな要素になっています。

(二) 姓名に、文字の音により変化の妙を求める：

音が単調だと、人を容易につかれさせてしまいます。たとえば、電車に乗るとすぐに眠くなります。中国の律詩は、音とリズムに非常に気を配っており、これでもって抑揚頓挫する音楽性とリズム感を作り出し、読む人が美を感じとることを可能にしています。ですから中国人が名をつけるときには、その音声に非常に大きな注意をはらいます。

上古の昔、人々はよく双声[語を構成する2文字の声母=子音が同じ]・疊韻[語を構成する2文字の韻母=母音が同じ]を使うことを好みました。『詩経』『楚辞』をひもといてみると、事物の名前では双声疊韻が数百を下りません。これが、おそらく古人が名をつけるときにも影響したのでしょう。『左伝』ではどれもこれもみなそうです。たとえば、祁弥明[qi2 mi2ming2、双声]・士弥牟[shi4 mi2mou2、双声]等がそうです。秦の始皇帝の二人の息子は、一人の名が扶蘇[fu2su1]（疊韻）で、一人の名が胡亥[hu2hai4]（双声）です。こういう現象は、後漢になってからだんだんと無くなります

が、それは王莽※の姓名が疊韻だからだったということです(王莽は漢を篡奪したので、軽蔑される)。

※王莽の音は、現代北京語では、wang2mang3。いずれも韻母は「ang」。

私の見るところ、声母・韻母が完全に同じ名前は、声を出して読んだ時に響きがよくないし、いいにくいものです。たとえば、方非凡[fang1fei1fan2]というのは、三つの字の声母がみな f です。林利律[lin2li4lü4]というのは、三つの字の声母がみな、l で、読んでみると非常にやっかいです。同じように、趙潮涛[zhao4chao2tao1]は、三つの字の韻母がみな ao です。儲祖魯[chu3zu3lu2]は、三つの字の韻母がみな u です。これもまた聞いて耳ざわりの悪いものです。これもまた後世、双声疊韻の名が廃れた原因の一つでしょう。

それから漢語は四声をそなえています(古代には、平・上・去・入の四つに分かれていました。今は、陰平=一声・陽平=二声・上声=三声・去声=四声に分かれています)。例えば一人の人の姓名が同じ声調でできているとしたら、単調で、音楽性やリズム感など問題にできません。たとえば、谷儉粉[gu3 jian3fen3]という姓名は三字とも上声で、谷建芬[gu3 jian4fen1、中国の著名な女性作曲家。1935~]が、美しく聞こえるのにはまるでないません。

(三) 似た音をうまく使って姓が名を引き出す工夫をする：

漢字は単音節※の語なので、同音の字がきわめて多く、それで中国人が名をつけるときには、字の意味だけでなく、音の重なりが品を失わないように気を配らねばなりません。

※一語がワンシラブル、一箇所しか母音が無い語。例えば、「社」は she で「e」の単母音が一箇所、「美」は mei で、「ei」の複母音が一箇所。これに対して、英語は、society なら母音が二箇所、beautiful なら母音が三箇所である。

例えば、朱史というのは、見た所はなかなかよさそうです、すなわち赤い歴史の意味です。しかし、その発音は「猪屎[zhu1shi3]と同じで、聞く人に汚らしい感じを与えます。また例えば、胡利金[hu2li4jin1]といえ、この名前は「狐狸精[hu2li2jing1 キツネの精]と音が近いので、人にいやな思いをさせます。人の姓は一般に変えようがありませんから(もちろん、姓の読み方を変えることはあります。たとえば

ある地方では、「史 shi3」という姓の音が「屎 shi3」「死 si3」とよく似ているので、「吏 li4」とよみかえています)、しかし我々がもし意識的に姓に似た音ということを利用しますと、名とうまくつながらせることができ、一風変わった、寓意の深い味のある、思ってもいなかった効果をもたらすことができます。たとえば、胡[hu2]という姓の人が、名が胡中舟である場合(湖中の舟に音が似ている)、于[yu2]という姓の人の名が得水である場合(魚が水を得るというのに音が似ている)、郝[hao3]という姓の人が、名が郝運である場合(好運と音が同じ)、袁という姓の人が、名が袁満[yuan2man3]である場合(円満[yuan2man3]と音が同じ)などが、そうです。

最後に形のことを話しましょう。

審美的な角度から言って、良い名前というものは、字の形がつりあっていて、紙に書いたときに覚えやすく、美しくなければなりません。漢字は象形文字で、筆画によって構成されています。この特別の条件が、中国人の名前の形についてのある民族的な特色をもたらしています。

#### (一) 命名には筆画の組み合わせを考える

具体的に三字の名前についていましょう。字形の上で、両端が重く中が軽い・両端が軽く中が重い、あるいは頭が重くしっぽが軽い、頭が軽くしっぽが重いといった傾向を避けなければなりません。たとえば、魏乙鱗(首尾の画数は17画と24画、中の字はたった1画、両端が重く中が軽い)・刁[diao1]馨人。また、戴一ト・丁彝樽。これらはみな人に不釣り合いな印象を与えます。このほか、命名にあたっては、それぞれの字の偏旁が完全に同じにならないようにしなければなりません。たとえば、宋守宇・唐庚度などの名前は、やはり重心が定まらず、単調な感じを与えます。

#### (二) 字形上、姓が名を生み出すという方法

古人は言っています、「独体を文と為し、合体を字と為す[一つの形が文であり、形を合わせたものが字]」※と。

※宋・鄭樵『通志』に、この語を漢儒の語として引いている。

漢字は少数の象形文字がそれ以上は分解できないのを除き、大多数は二つ以上の意味のある部分に分けることができます。姓氏もそうです(たとえば、牛・ト・羊などの少数の姓はこれ以上分解できませんが、大多数は分解できます)。ですから、姓を割って名にするというのも古くから行われています。姓を割って名にするということの深層

には、ある種のユーモアと機知がひそんでいて、こういう名は一度見たら忘れられないものです。例えば、著名な作家の張長弓（意味は長い弓を引っ張る、勇躍試してみようという気持。[1931～2000、小説「漠南魂」「紅柳」等、作品多数）、著名な漫画家の雷雨田（意味は雷雨が田に水を灌ぐ。◆[1974～。陝西書画報執行総編・中国油画協会会員]）。

◆『詩経』小雅「甫田之什・大田」に「我が公田に雨ふりて、遂に我が私に及ぶ」とある。

老舍[1899～1966、小説家・劇作家、北京をこよなく愛した]先生の原名は舒慶春ですが、中学時代に自分で改めて舒舎予としました。これは姓を割るという習慣を上手に運用しただけでなく、彼が自分を捨てて、全てをささげようとした気持を表わしています。またたとえば、「賀加貝」は、「寶貝が増加したのを祝賀する」の意に理解できますし、諧音[「加」と「家」は同音]から「賀という姓の家の寶貝」ともとれます。

### (三) 名前が五行の習慣を現している

過去、人々は陰陽五行説を信じていました。子供が生まれると必ず盲目の人に運命を占ってもらい、命が五行(金・木・水・火・土)の中でどこに位置しているのかを確かめ、名前の字形に手を加えるのです。たとえば、本人の命が土に欠けているということなら、名を「志翹」とつけて、一挙に三つの土を加えるのです。古人は三を多数とっていましたから、名が黄森という人は、たぶん、命に木が欠けているのです。

### (四) 名の中に点を入れる習慣

名の中に点がないと、「一点没有」(なにもない、ひどくまずい)ということになってしまいます。ですから「吉昌中」というような名前は、たとえ字の意味は悪くなくとも、貧しい名でタブーだとされるのです。ざっと中国人の名を見たところ、多数の人の筆画の中に、少なくとも、一つ点があるのは、おそらくこういう心理の反映でしょう。

このほか、補足的に説明しなくてはいけないのは、長い封建社会において、諱<sup>いみな</sup>を避けるという習慣がありました。この習慣の始めは、たぶん子孫の祖先に対する尊敬の念であり、後には支配者の権威を恐れるものになり、支配者と同じ名はつけないようになりました。たとえば、漢代に蒯徹<sup>かいてつ</sup>という策士がいましたが、漢の武帝が

劉徹という名ですので、彼は名を改めて蒯かいとう通◆とせざるを得ませんでした（通と徹とは同義）。

◆蒯通は、前漢、范陽の人、本名徹。楚漢の時、弁舌と謀に巧みなことで有名だった。武信君はその策を用いて燕趙の三十余城を降し、漢の將軍韓信はその計を用いて、齊の地を定めた。

明代の湖広巡撫の宋一鶴は、上司の総督楊嗣昌に挨拶に行こうとして、楊嗣昌の父の名が鶴なので、名刺に自分の名を改めて宋一鳥とするしかなく、笑うにも笑えないこととなりました。これがとんでもないところまでいって、諧音（同音）でさえも避けなければならないようになります。唐代のわかい詩人李賀は、父の名が李晋肅であるために、進士の試験に参加できませんでした（合格すると李進士になりますが、「進」と「晋」は音が同じ）。こうしてこの天才詩人は27歳で鬱々と悶えながら死んでしまったのです。名前をつけるのに諱を避けるのは封建時代の産物です。封建社会の崩壊とともに、こうした習慣は次第に消えていきます。しかし、十年の動乱の期間、こうした悪習がまた別の形で復活しました。あの時代、名前の中に、ちょっとでも「四旧」◆があると、タブーを犯したとされたのです。たとえば、わたしのともだちは、もと名前が徐忠孝であり、「忠」「孝」は封建意識だと考えられたため、徐中笑（毛沢東の『詠梅』詩※に「她在叢中笑」という一句がある）と名を改めました。うまいことはうまいけれども、やっぱり苦い思いを感じざるを得ません。けれども、こういう時代はもう過ぎ去りました。

◆「四新」（8頁）の注を参照。

※「卜算子・詠梅」という詞。「風雨春の帰るを送るも、飛雪春を迎えて到る。已に是れ懸崖百丈の氷、猶うるわお有り花枝うるわのうわ俏うわしき。俏うわしきも春と争わず、只だ春の来たるを報ず。山花の爛漫なる時の到るを待ちて、她むすめ〔梅〕は叢中にて笑う」。

以上、中国人の姓名の文化的由来について、ただ表面を撫でただけの話をさせていただきました。もし詳しく述べようとすれば、たぶん一冊の専著が必要でしょう。残念ながら私は貴国の姓名の問題についてあまり研究はしていないのですが、想像するに、中日両国はいずれも東方の民俗であり、また漢字文化という共通の基礎をもっています。姓名を考える場合もきっと同じようなことが少なくないと思います。もし両国の名付け方について比較ができるなら、それは極めて有意義で、同時にまた興味深い仕事になるでしょう。私は日本の専門家及び志を同じくする方のお

教えを心から期待しております。

※訳者補記：この文章は、2013年12月7日(火)の午後、第3限、帝塚山学院大学において行われた董志翹氏の講演の発表原稿を、下定雅弘が翻訳したものである。董志翹氏は、当時、蘇州大学中文系の教員であり、花園大学に客員教授として来ておられた。その後、四川大学教授を経て、南京師範大学に移り、現在は同大学特聘教授、中文系主任、漢語史研究所所長として活躍しておられる。

※この発表原稿は、帝塚山学院大学中国文化研究会発行「中国文化論叢」3号(1994.4、p74-82)に「中国人姓名的文化底蘊」と題して収載されている。

※董志翹氏の履歴を、百度百科から引いておく。

1950年8月28日生，汉族，浙江省嘉兴市人。现任南京师范大学文学院特聘教授，汉语言文字学专业博士生导师，中文系主任，汉语史研究所所长，院、校学位委员会委员，国家级教学名师。曾毕业于苏州大学中文系、四川大学中文系汉语史研究所，获文学博士学位。先后任苏州大学中文系讲师、副教授，日本国京都花园大学客座教授，四川大学文学与新闻学院教授、汉语史研究所所长，2000年调入南京师范大学。现兼任国家教育部人文社会科学重点研究基地——四川大学中国俗文化研究所兼职教授、学术委员会委员，浙江大学汉语史研究中心兼职教授。温州师范学院兼职教授。中国语言学会理事，中国训诂学研究会常务理事、学术指导委员会委员，江苏省语言学会常务理事。